



## 《青鞞》创刊词选节

平塚雷鸟

(翻译 陈焰)

元始，女性就是真正的太阳，是真正的人。现在，女性却是月亮，是依附他人而生存，借助其他人的光芒辉映方才闪现出如病人般苍白脸色的月亮。

然而在这里，《青鞞》呱呱坠地了。

现代日本女性用自己的手，经自己的思考首创的《青鞞》闻世了。

女性所做的事在现如今只会遭人嘲笑。

我深知这种嘲笑背后所隐藏的是什么，然而我却丝毫不感到惧怕。

自由和解放！“女性要自由要解放”的声音在我们耳旁已响彻好久了。然这究竟是什么？我以为，这自由和解放的真正意义在很大程度上是不是已被误解？确实单就女性解放问题而言，这本身所包括的问题是很多的，但是，为什么仅仅只是能够让女性脱离外界的压迫和束缚；接受所谓的高等教育；在一般广泛的职业范围就职；得到参政权益；摆脱父

母或丈夫家庭小天地的所谓保护而能独立生活等，就当是女性的自由和解放？也许这些是女性争取到达真正自由解放领域的好机遇，但无论如何这也只是一种权宜，是手段。不是目的，也不是理想。

话虽这么说，当然我不是那种和日本诸多有识人士类似的“女子高等教育不必要主张者”。本来由同一本质的“自然”所诞生的男女，一方该接受教育另一方却不应接受教育这种事情，即便暂时在某个国家、某个时代得到认同，但从根本上稍加思索，其不合理是显而易见的。

我不忍看那些轻率地羡慕男性、模仿男性、跟男士走在同一条路上都要故意放慢脚步的女性。

那么，我所希望的真正意义上的女性自由解放到底是什么？无须说，就是要把女性至今还潜藏的能力与天分完全地充分地挖掘和发挥出来。为此，我们的首要任务就是要排除所有阻挠女性发展的障碍。这些障碍包括来自外部的压迫及一般性知识缺乏等问题，不能说完全不是。然而，最主要的障碍却是来自于我们自身，我们这些天才的拥有者。天才所居住的宫殿的我们自身。当我们脱离我们现有的自身时，就会发现自身所潜藏的天才。

我要跟所有的女性一起来确信女性具有潜在的天性。我唯一坚信的是女性能自立，能独立，这就是作为女性来到这个世上对所感受到的幸福，想从内心表现出的由衷地喜悦。

能够拯救我们的只是我们内在的天才本身。事到如今，我们已经不能够求神于寺院或教会，我们也不能够等待上帝的启示，藉由我们自身的努力，展现出存于我们心中的那份自然奥秘，我们要走的路应该是由我们自己来指引的。

女性不再是月亮。

那一天，女性仍然是元始的太阳，是真正的人。

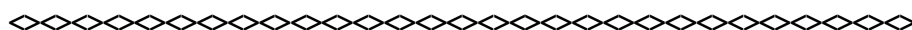
我们要在太阳升起的东边的水晶山上，营造起一座既大又圆的金碧辉煌的黄金宫殿。

女性啊！在给自己画肖像时，不要忘记挑选金色的圆天花板。

纵然，我会中途倒下，纵然，我会像那破船的船夫那样沉没海底，我也仍然会举起已麻痹的双手，发出生命的最后一声绝唱“女性，前进，前进！”

.....

平塚雷鳥(1886～1971)出生于东京。思想家。1911年9月，以平塚雷鳥为代表由女性创办的日本最早的文艺杂志《青鞥》创刊。虽然在1916年2月号后停刊，但是她即使在第二次世界大战后还仍然继续站在反战和平和妇女运动的先例。



(日本語原文) 青鞥 発刊の辞より 平塚雷鳥

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。さてここに、「青鞥」は初声<sup>うぶごえ</sup>を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によって初めてできた「青鞥」は初声を上げた。

女性のなすことは今は只<sup>あざけ</sup>嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知っている、嘲りの笑の下に隠れたるあるものを。

そして私は少しも恐れぬ。

自由解放！ 女性の自由解放という声は随分久しい以前から私共の耳辺にざわめいている。しかしそれが何だろう。思うに自由といい解放という意味がはなはだしく誤解されていしなかつたろうか。もつとも、単に女性解放問題と言っても、その中には多くの問題が包まれていたろう。しかしただ外界の圧迫や拘束から脱せしめ、いわゆる高等教育を受け、広く一

般の職業に就かせ、参政権をも与え、家庭という小天地から、親といい夫という保護者の手から離れていわゆる独立の生活をさせたからとて、それが何で私共女性の自由解放であろう。なるほどそれも真の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機会とを与えるものかも知れない。しかし到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。

とはいえ、私は日本の多くの識者のような女子高等教育不必要論者ではもちろんない。「自然」より同一の本質を受けて生れた男女に一はこれを必要とし、一はこれを不必要とするなどのことは、ある国、ある時代において暫くは許せるにせよ、<sup>すこ</sup>少しく根本的に考えればこんな不合理なことはあるまい。

私は<sup>むやみ</sup>無暗と男性を羨み、男性に真似て、彼等の歩んだ同じ道を少しく遅れて歩もうとする女性を見るに忍びない。

然らば私の<sup>ねが</sup>希う真の自由解放とは何だろう。いうまでもなく<sup>ひそ</sup>潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に発揮させることに外ならぬ。それには発展の妨害となるもののすべてをまず取り除かねばならぬ。それは外的の圧迫だろうか、はたまた智識の不足だらうか、否、それらも全くなくはあるまい、しかし、その主たるものはやはり我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである。我々を遊離する時、潜める天才は発現する。

私はすべての女性と共に、潜める天才を確信したい。ただ唯一の可能性に信頼し、女性としてこの世に生れ来た我等の幸を心から喜びたい。

私共の救い主はただ私共の内なる天才そのものだ。もはや私共は寺院や教会に仏や神を求むるものではない。私共はもはや天啓を待つものではない。我れ自からの努力によって、我が内なる自然の秘密を曝露し、自から天啓たらんとするものだ。

もはや女性は月ではない。

その日、女性はやはり元始の太陽である。真正の人である。

私共は日出づる国の<sup>ひんがし</sup>東の水晶の山の上に、目映ゆる黄金の大圓宮殿を  
営もうとするものだ。

女性よ、汝の肖像を描くに常に金色の円天井を撰ぶことを忘れてはなら  
ぬ。

よし、私は半途にして<sup>たお</sup>斃るとも、よし、私は破船の水夫として海底に沈  
むとも、なお麻痺せる双手を挙げて「女性よ、進め、進め。」と最後の息は  
叫ぶであろう。

.....  
本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代  
かなづかいに改めたものです。